

音楽取調掛編纂「幼稚園唱歌集」における

欧米幼稚園唱歌・学校唱歌のとり入れ方

藤田芙美子

日本の幼稚園での唱歌教育は、明治十年の東京女子師範学校附属幼稚園での「保育唱歌」実践にはじまり、音楽取調掛編纂「小学唱歌集」「幼稚園唱歌集」へと教材を変遷してゆく。これらの

教材を特に音楽様式面から眺めると、その発展には日本の西洋音楽撰取の歴史を反映しているともいえるのがみられる。又各時代の教材は、今日の幼稚園での音楽教育を築く基となったところの様々な特色をもっている。このような特色をもった幼稚園音楽教材の内容を明らかにし、その教材を幼児達が保育者達がどのようにとり入れ、どのように継承してきたかを調査し考察することは、制度的に比較的自由な立場にあった幼稚園という場での実践

であるだけに、意味のあることに思われる。今日のわれわれ日本人の音感覚の相知るための、又、これからの幼稚園での音楽教材を考えるための手がかりの一つになるであろう。

本稿は音楽取調掛編纂「幼稚園唱歌集」（明治二十年刊行）をとりあげ、その楽曲が当時の欧米唱歌教材からどのように採用されたかを中心に調査を行ない、そこに含められた音楽の種類を明らかにすると共に、その楽曲が当時の幼稚園教育に与えた影響を考察しようとするものである。

I 「幼稚園唱歌集」作成の経過

幼稚園での唱歌教育は学校唱歌教育に先んじて明治十年に東京

女子師範学校附属幼稚園で「保育唱歌」の実践をもってはじめられた。それは欧米フレーベル系幼稚園書の翻訳書「幼稚園」及び「幼稚園記」の唱歌遊戯を参考にして、主に歌詞を当時の附属幼稚園関係者が作り、曲を雅楽課伶人達が作曲したものであった。

このような幼稚園での唱歌教育の試みとは別に、学制が制定されて以来文部省の懸案の事項であったところの学校唱歌教材作成にとりかかったが、既に実践されていた「保育唱歌」については早い時期から調査を行なっていた。「小学唱歌集」「幼稚園唱歌集」と「保育唱歌」は、作成の手順において共通する点が多い。

一方、音楽取調掛は作成した唱歌の実践においても東京女子師範学校附属幼稚園とは協力関係にあった。メイスンは音楽取調掛着任のために来日すると間もなく東京女子師範学校及び幼稚園に出向いて音楽指導をはじめている。この指導はメイスンが帰国する明治十五年七月まで続けられるが、その指導成果は他の実践校の上級生徒にくらべてめざましいものであったという。

幼稚園児達が唱歌にめざましい進歩を示していたことは音楽取調掛が明治十五年一月に二日間にわたって催した第一回成績報告音楽会に園児達が出演することにもあらわれている。この時、後に「幼稚園唱歌集」に収録される唱歌「数へ歌」「進め進め」「ますらお武士（心は猛く）」「我門（ここなる門）」「蝶々」「霞か雲

か」の六曲が発表される。又明治十五年七月のメイスン送別音楽会においてもこのうちの「我門」をのぞく全曲が附属幼稚園児達によって歌われている。

歌詞の編纂過程については、山住正己氏著「唱歌教育成立過程の研究」に詳しいので、ここでは重複して述べないが、編纂過程において特に重要な修正変更は行なわれていない。今日歌詞草稿は第一案から第四案まで残されているが、第四稿には当時東京女子師範学校附属幼稚園で実践されていたと考えられる遊戯唱歌「雁の輪」と、保育唱歌の遊戯歌「めかくし」「家鳩」「民草」が含まれている。この四曲は刊行本には含められないが、編纂の過程において「保育唱歌」を教曲採用しようとする意向があったことをはっきり示している。又この期に音楽取調掛と東京女子師範学校附属幼稚園主任保母の唱歌についての意見交換が行なわれていることから、第四案には当時の幼稚園保母清水たづの直接の意見が加えられていることが考えられる。

以上に述べたように「幼稚園唱歌集」の編纂にあたっては、音楽取調掛が東京女子師範学校附属幼稚園での唱歌遊戯の作成と実践の経験を直接に間接に反映していたことが十分に考えられるのである。

「幼稚園唱歌集」には巻頭に次のような内容の緒言が添えられ



ている。

一、本編は児童が始めて幼稚園に入り、他人と交遊することを習うにあたって、嬉戯唱和の際、自ら功徳を涵養し、幼智を開発する為に用いる歌曲を編纂したものである。

一、唱歌は幼稚の性情を養い、発声の節度の習慣をつけるものであるからことに幼稚園が必要である。諸種の園戯も音楽の力をかりなければ十分に効果を奏することはできない。

一、幼稚園の唱歌は特に拍子と調子に注意しなくてはならない。

拍子がゆっくりすぎると活発爽快の精神を損じ、調子の高低がその度を過ぎると音声の発達を害するだけでなく幼児は嫌になり、性格がのびのびと明るくなることを妨げる。本編はこれらの点に注意して選定した。

一、幼稚園には箏、胡弓、洋琴、風琴のような楽器を備えて幼稚の唱歌に協奏することを要す。楽器によって唱和の力を増し、深く幼心を感動させることができる。

ここには幼稚園での唱歌活動の目標、必要性、実践にあたっての注意事項が具体的に述べられている。しかしこの緒言は音楽取調掛に一冊だけ保存されていたフレイベル系幼稚園書、ウィーベ(Wiebe, E.) 著 "The Songs, Music and Movement Play of the Kindergarten" (Liverpool: Philip Son & Nephew, New York: E. Steiner) ^(註) の序文内容にほとんど一致するものである。この書の唱歌から「幼稚園唱歌集」に採用した楽曲も多いことから、序文内容もそのまま做ったことが考えられる。

その内容は「徳性の涵養」を中心目標としている。「小学唱歌集」の緒言にくらべてより具体的であり、幼児に即し、音楽に即している。

II 「幼稚園唱歌集」の楽曲構成

「幼稚園唱歌集」には全部で二十九曲の唱歌が収録されている

る。この二十九曲の性格をできるだけ正確にとらえるために、これらの曲が当時の欧米のどのような唱歌集から採用されるに至ったかを調べてみた。これまでの研究と今回の調査の結果、二十一曲についての原曲及び作曲者等が明らかになった。表(p 52-53)はその結果を示すものである。出典は「幼稚園唱歌集」編纂当時までに文部省に輸入されていて参考とされたと考えられる外国音楽教科書、幼稚園書、唱歌集の唱歌を「幼稚園唱歌集」のそれと照合して調査した。

表から、楽曲内容の判明している二十一曲が次のような構成になっ
ていていることがわかる。

- 一、外国の音楽教科書から採用した唱歌 十七曲
- 二、邦人作曲作品 三曲
- 三、わらべうた 一曲

外国音楽教科書から採用された十七曲については更に次のような経路が考えられる。

- 一、Hohmann 編ドイツ教科書→Mason 編アメリカ教科書→(小
学唱歌集)→幼稚園唱歌集(「蝶々」)(霞か雲か) 「雨
露」「やよ花楼」「燕」「蜜蜂」 六曲
- 二、Wiebe 編イギリス幼稚園書→幼稚園唱歌集 「真直に立
つて」「ごこなる門」「うづまく水」「兄弟妹」「操練」「羽

の鳥」 六曲

三、Ronge 編イギリス幼稚園書幼稚園唱歌集 「毬」 一曲

四、Training School Song Book イギリス教科書→幼稚園唱歌集

「進め進め」「若駒」「環」 三曲

五、アメリカ教科書→幼稚園唱歌集 「心は猛く」 一曲

ここには二通りの特徴的な流れがみられる。即ち、一、四、五、のメイスンを通してもたらされた欧米学校音楽教科書から採用されたものと、二、三、の欧米幼稚園書から採用されたものである。このように欧米学校教科書と幼稚園教育書からその楽曲の大半を採用している「幼稚園唱歌集」は、当時の欧米の唱歌教材の特色も又そのままに反映したものになっている。楽曲の種類としては、ドイツ、フランス、スペイン民謡が七曲、フランスとドイツのポピュラー・エアが二曲、作曲作品が三曲含まれていて、欧米の民謡及び民謡風作品がその中心をなしている。

日本の楽曲は全部で四曲。内訳はわらべうた一曲、作曲作品三曲である。

楽曲の特徴として次の事柄があげられる。

〈音域〉

二十九曲中二十一曲が1オクターブ以内の曲で、音高はh1f2まで。ウィーベが序文に述べている幼児に適当な音域の制限b1-

に限定されている。

〈調性〉

雅楽的旋法（無半音5音）の「風車」、都節音階（有半音5音）の「数へうた」^{amoll}→^{Fdur}に転調する「川瀬の千鳥」をのぞいて他全部が^{dur}の曲である。^{Gdur}と^{Fdur}の楽曲が二十曲で全楽曲の大半を占めている。ただし^{dur}の楽曲の中には「f」と「t」を用いないそして日本の音型である上から「短3度・長2度」「長2度・短3度」の順次進行を手がかりにしている典型的な「ヨナ抜き音階」（無半音5音）の曲「友どち」が含まれている。この曲は作曲者は判明していないが、この音型の特徴から邦人作曲作品と考えられる。^(譜例1)又、全音階的旋律進行をする「t」を用いない西洋楽曲も多。^(譜例2)これは9曲含まれている。

伊沢修二作曲「子ども子ども」「花咲く春」はいずれも^{Gdur}で書かれていて「t」を用いない6音域の楽曲である。そして先に述べた日本の音型「短3度・長2度」「長2度・短3度」の特徴的な進行を随所に用いたものである。それは6音域を用いた他の西洋楽曲が旋律進行において全音階的・和声的・3和音的・ゼクエントツ的であるのに比べて違った旋律印象を与える。^(譜例3)

〈拍子〉

2/4拍子が十二曲、4/4拍子が十曲、6/8拍子が五曲、4/8

拍子が二曲

これらの特徴をウィーベ幼稚園書の唱歌遊戯の楽曲の特徴と比較してみると、多く用いられている調、拍子について、又短調が含まれられずほとんど長調であることは全く共通した特徴であることが認められる。しかし、ウィーベには全体の17%含まれている3拍子系の楽曲が、「幼稚園唱歌集」には全く含まれていない。

以上「幼稚園唱歌集」の楽曲の特徴は次のようにまとめられる。その大半の楽曲が当時の欧米学校教科書及びフレーベル系幼稚園書の唱歌をそのままに採用したものである。したがって当時の欧米唱歌教材の特徴である欧米の民謡が中心になっている。それは5音から8音の狭い音域のもので、全音階的な旋律進行をずる長調の曲である。音階音の第7音を用いない楽曲が多い。一方、わずかながら邦人作曲作品も三曲含まれている。この三曲には各々に全音階的枠内で日本人が歌うための初期の試みが認められる。

Ⅲ 「幼稚園唱歌集」の実践

「幼稚園唱歌集」は明治十六年中に編纂は完了していたと考えられるが、何故か刊行されるのは明治二十年になる。この間、明治十七年頃から東京女子師範学校及び各地に開設された幼稚園

第七

1. ひもどき きたれ らんく トホ トホトキ
 2. ひもどき きたれ いがや コシ むい のみち
 アなびて まし むさし マウラヒコテ ニまて
 二一 まい とる マナモ トモトモ ニ

▲ 譜例 1

第十三

1. アメツ エウルカーロ テー ニヤマーハ ホエ
 2. あろつき ゆきふて むー そのふーに はな
 サクラハ ワラハリ イガユカン ユチムレテ
 にはに は たはしく みよみよ ぐちいきて

▲ 譜例 2

第二十二

1. ミミ トト ミミ トト ロロ ママ キチ ウツ ツツ イイ クク
 ミミ ツツ イイ ウツ ツツ イイ クク ミミ ツツ ニモ
 ナミ ラメル トレ トレル メロ グク シロキ ミツ ヨホ ミミ ヨホ
 ロロ トト ミミ ウツ ツツ ママ クク ミミ ツツ マモ

第十五

譜例 3

で、唱歌教材として稿本のまま用いていた記録が残っている。^(注11)

又、明治二十年代になると各地で子どものための唱歌集が多数発行されるようになり、それらの唱歌集に「幼稚園唱歌集」の唱歌が転載されるようになる。「幼稚園唱歌集」の稿本の写しは各地に広まり、その発行が望まれていたらしい。このことは「幼稚園唱歌集」を文部省が刊行する明治二十年十二月に先んじて同年三月、四月にそのほとんど全容を含む唱歌集が大阪で東京で発行されていることから推察することができる。^(注12)

「幼稚園唱歌集」の楽曲が実際にどの程度幼稚園で用いられていたかを知るために、東京女子師範学校附属幼稚園での「幼稚園唱歌集」実践の経過を追ってみたところ、明治二十六年に「蝶々」「風車」「ここのなる門」「数へうた」「霞か雲か」「うずまぐ水」の六曲、明治三十九年には「風車」「蝶々」の二曲、というように次第に実践される唱歌の数が減ってゆく。^(注13)そして明治三十四年に出版された「幼稚園唱歌」（東くめ、滝廉太郎他作詞作曲）他の唱歌集が多く用いられるようになる。

「幼稚園唱歌集」の唱歌が次第に用いられなくなる理由は、歌詞が文語体であるために幼児に理解されにくい。遊戯法が付記されていないので「遊びながら歌う」幼稚園では用いるのに不便である。等が考えられているが、その後の幼稚園で用いられる唱歌

が再び邦人作曲作品中心になること、「幼稚園唱歌集」の唱歌が実践され残ってゆく点で「保育唱歌」よりも根強くなかったこと等考えあわせると、全音階的、和音的旋律進行をする長調の楽曲で、西洋のリズム型の欧米民謡の旋律をそのままに歌うことは、当時の幼児にとって保育者にとって難しかったことが加えて考えられる。比較的長く歌われた唱歌が「数へうた」「風車」のような日本の旋律進行のものであること、西洋歌の中でも「蝶々」「ここなる門」「うずまく水」等、音域の狭いリズム型も単純なものに限られているのはこのことを示しているのではないだろうか。

明治三十年代に入ると、これまでの幼稚園の遊嬉及び唱歌のあり方が反省されるようになるが、明治三十九年制定の「女子高等師範学校附属幼稚園保育要領」の唱歌についての記述は、「保育唱歌」「幼稚園唱歌集」等を実践した結果の歌詞について楽曲についての反省を明確に示し、唱歌教材の転換を示唆しているのでその内容をここに記しておく。

- 一、歌詞は幼児に理解し易い談話体、普通文体とする。
- 二、歌詞内容は幼児の興味を起すのに適当なものであること。
- 三、楽曲は音域が広すぎず、音程が簡単で、拍子は、 $\frac{4}{4}$ あるいは、 $\frac{2}{4}$ のものとする。

(国立音楽大学)

※

※

※

原曲の収録文献及び

原曲に関する参考文献(注10)

	調性	旋法他	拍子	音域
(伊)	F dur		$\frac{2}{4}$	c'~b' (si~f) 7音域
(伊)(伊 ₂)(遠)(M)(F)(小)	G dur		$\frac{2}{4}$	g'~d ² (d~s) 5音域
(伊)(遠)(NM)(F)	F dur		$\frac{2}{4}$	c'~d ² (si~l) 9音域
(伊)(遠)(M)(M・B・A)(H)	D dur	tを用いない	$\frac{4}{4}$	d'~d ² (d~d')
(W)(D)(小)(NM)	E dur		$\frac{4}{8}$	es ¹ -es ² (d~d')
	C dur		$\frac{6}{8}$	g'~e ² (si~m) 6音域
	G dur	tとfを用いない 無半音5音階	$\frac{4}{4}$	d'~d ² (si~s)
(遠)(伊小)	G dur	tを用いない	$\frac{2}{4}$	d'~d ² (si~s) 8音域
(遠)(M・B・A)(M)(NM)(F)(B)	G dur		$\frac{2}{4}$	d'~d ² (si~s) 8音域
(遠)	G dur		$\frac{6}{8}$	d'~e ² (si~l) 9音域
(NM)	d moll→ F dur	tを用いない	$\frac{6}{8}$	c'~f ² (d _{si} ~d')
	G dur		$\frac{6}{8}$	d'~d ² (si~s) 8音域
(M)(M・B・A)(H)	Es dur	ltを用いない	$\frac{6}{8}$	es ¹ -es ² (d~d')
	F dur		$\frac{4}{4}$	f'~d ² (d~l) 6音域
(遠)(伊小)	G dur		$\frac{4}{4}$	g'~e ² (d~l) 6音域
(遠)(M)(H)(W)	F dur		$\frac{4}{4}$	c'~f ² (d~d')
(M)(H)(W)(D)(B)	G dur	fを用いない	$\frac{4}{4}$	d'~d ² (si~s) 8音域
(W)(D)	F dur		$\frac{2}{4}$	c'~f ² (si~d')
	F dur		$\frac{4}{4}$	f'~f ² (d~d')
(伊)(遠)(H)(M)(W)(NM)	G dur		$\frac{4}{4}$	d'~c ² (si~f) 7音域
(遠)(P)(W)(F)	G dur		$\frac{2}{4}$	g'~e ² (d~l) 6音域
(遠)	F dur		$\frac{2}{4}$	f'~d ² (d~l) 6音域
(R)(P)	A dur		$\frac{2}{4}$	e'~d ² (si~f) 7音域
(W)	F dur		$\frac{4}{4}$	c'~f ² (si~d) 11音域
(W)(D)(Bö)	F dur		$\frac{2}{4}$	c'~d ² (si~l) 9音域
(保)		宍越調律旋・ 無半音5音階	$\frac{2}{4}$	d'~c ² (d~r')
(遠)(H)(M)(NM)	G dur		$\frac{2}{4}$	g'~d ² (d~s) 5音域
(W)	A dur		$\frac{2}{4}$	e'~d ² (si~s) 8音域
(伊)(遠)(伊小)		都節音階・ 有半音5音階	$\frac{4}{4}$	h~e ² (m~l) 11音域

表「幼稚園唱歌集」の楽曲構成

	作 詞	作 曲
1 心は猛く	里 見 義	Mason, Lowell
2 蝶々	野村秋足・稲垣千頰	スペイン民謡
3 進め進め	加 部 巖 夫	フランス民謡
4 霞か雲か	〃	ドイツ民謡
5 学べよ		
6 にはつ鳥		
7 友こち		
8 子ども子ども	伊 沢 修 二	伊 沢 修 二
9 若駒		Hering, Carl Gottlieb
10 大原女		ドイツ民謡
11 川瀬の千鳥		
12 竹むら		
13 雨露		Reichardt, Johan Friedrich
14 冬の空		
15 花さく春	伊 沢 修 二	伊 沢 修 二
16 やよ花楼		ドイツ学生歌
17 燕		ドイツポピュラーエア
18 真直に立てよ		
19 我大君		
20 ここなる門	加部巖夫・豊田英雄	
21 うずまく水		フランス・エア
22 環		支那旋律
23 毬		
24 兄弟妹		
25 操練		ドイツ民謡
26 風車		東 儀 季 熙
27 蜜蜂		ボヘミヤ民謡
28 一羽の鳥		
29 数へうた		日本わらべうた

注1 桑田親五訳「幼稚園」 文部省発行 上巻明治九年 中巻

明治十年 下巻明治十一年

関 信三訳「幼稚園記」 東京女子師範学校発行 一卷—三

巻明治九年 附録明治十年

注2 藤田芙美子「保育唱歌研究——フレibel式幼稚園唱歌遊

戯移入の経過を中心として」国立音楽大学創立五十周年記念

論文集参照

注3 東京芸術大学図書館編 音楽取調掛時代所蔵目録2

10・11 諸向往復書綴 6 明治十三年六月二十五日 東京女

子師範学校並びに幼稚園で使用中の唱歌類音楽取調掛にて入

用につき回付依頼

明治十三年六月二十八日 右の回答 この後、東京女子師範

学校と「保育唱歌」に関する問合せの往復文書が度々かわさ

れている。

注4 伊沢修二「音楽取調成績申報書」明治十七年、p.222

「東京女子師範学校ニ於テハ明治十三年四月本科生及附属小

学生ニ伝習ヲ始ム同十四年二月子科生ニ之ヲ施シ同九月幼稚

園ニ及ボス」

注5 伊沢修二 前掲書 p.223—p.224

倉橋惣三 新庄よしこ「日本幼稚園史」フレibel館 明治

三十一年 p.283—p.285

6 東京芸術大学音楽取調掛研究班編「音楽教育成立への軌

跡」音楽之友社 昭和五十一年 p.467 明治十五年一

月三十、三十一日演奏会プログラム

p.471 明治十五年七月一日 メーン送別会プログラム

注7 山住正己「唱歌教育成立過程の研究」東京大学出版会 昭

和四十二年 p.112—p.115

注8 東京芸術大学前掲書

49・50 往復書類 明治十七年

63 明治十七年三月三十一日 女子師範へ保育唱歌取調に

き主任一人出校の依頼

注9 出版年は不詳であるが、一八六九年発行“Wiebe, E. Para-

dise of Childhood”の付録であるとの記述があるのでこの頃

の出版と考えられる。

音楽取調掛所蔵のものは第二版である。

注10 原曲の収録されている文献

1. Hohman, C.H. “Practical Course of Instruction in Singing”

Part I, Part II, Part III. 1856—1858 (H)

2. Mason, Baldwin, Locke, Aiken “The Youngest Singer”

Part I, Part II. 1860 (MBA)

3. Mason, L.W. "First National Music Reader" 1870 (M)
 - Mason, L.W. "Second National Music Reader" 1870 (M)
 - Mason, L.W. "Third National Music Reader" 1871 (M)
 4. Ronge, J. and B. "Practical Guide English Kindergarten" 1855 (R)
 5. Wiebe, E. "Songs, Music and Movement Plays" 1869 (W)
 6. Douai, A. "The Kindergarten" 1871 (D)
 7. "Plays and Songs for Kindergarten and Family" 1874 (P)
- 原曲に関する参考文献
- 伊沢修二「唱歌略説」東京芸大稿本(伊)
- 伊沢修二「唱歌略説」上伊那稿本(伊2)
- 遠藤 宏「明治音楽史考」(速)
- Mason, L.W. "The New First Music Reader" 1892 (N.M)
- 音楽取調掛「小学唱歌集」(小)
- 伊沢修二「小学唱歌」第一卷—第六卷(伊小)
- McCaskey, J.P. "Franklin Square Song" 1881 (F)
- Berry, E. "Kindergarten Songs and Games" (B)
- Reclam 版 "Kinderlieder" (K)
- Böhm "Lieder de Deutschen 18 und 19 Jahrhundert" (Bö)

注11 文部省第十二年報 東京女子師範学校明治十八年十月二十

七日付 明治十七年度報告書、附属幼稚園規則に、「幼稚園唱歌集、幼稚園遊嬉ハ未タ出版セザレドモ稿本ノマ、仮リニ用フ」の記述有

東京都編「東京の幼稚園」都史紀要14 昭和四十一年 p.46
 深川幼稚園保育課程表中、「……幼稚園唱歌集幼稚園遊嬉ハ未タ出版セザレドモ稿本ノママ仮リニ用フ、但以上ノ教書ハ東京女子師範学校ノ稿本ヲ借用謄写ス」の記述有

注12 真鍋定造編「幼稚園唱歌集」大阪普通社 明治二十年三月出版

増山英次編「幼稚園・小学校 こども歌」香雲書楼 明治二十年四月出版

注13 下田たづ筆「東京女子師範学校附属幼稚園分室ニ関スル事」の唱歌に関する記述 大正十四年記
 「女子高等師範学校附属幼稚園保育要領」女子高等師範学校 明治三十九年